

坂上遺跡

2000. 3

北相木村教育委員会

『坂上遺跡』正誤表

下記の箇所に誤が入りましたので、お手数ですが訂正くださいますようお願ひいたします。

訂正箇所	誤	正
P5・L9	(第6図1)	(第6図2)
P5・L23	2とは異なり	1とは異なり
P17・L24	7は井戸尻3式の	7は井戸尻1~3式の
P21・L13	付加状の	付加条の
P25・付表・図版番号6-1・部位	完形	口縁・脣部
P25・付表・図版番号6-2・部位	口縁・脣部	完形
P26・付表・図版番号15-13・部位	口縁?脣部	口縁・脣部
P27・付表・図版番号18-15・文様及び外面調整	付加状繩文	付加条繩文
図版8	18-5	18-4
図版8	18-4	18-5
報告書抄録・調査期間	1998625	1998630

SAKAUE SITE

坂上遺跡

2000. 3

北相木村教育委員会

例　　言

1. 本書は長野県南佐久郡北相木村坂上に位置する坂上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、村単独事業医師住宅建設にともない、村当局より北相木村教育委員会が委託を受け、同教育委員会学芸員藤森英二が担当した。
3. 発掘調査は平成10年6月30日から7月14日まで行ない、報告書作成作業を平成12年3月31日まで行った。
4. 本書の執筆は藤森英二が行った。
5. 調査および報告書作成にあたり、次の諸氏並びに関係機関より御協力・御指導を賜った。記して心より感謝の意を表したい。(敬称略)
阿部芳郎・石川日出志・大竹幸恵・小川直裕・小口達志・熊井久雄・小山岳夫・田中浩江・堤 隆・寺内隆夫・富田孝彦・野口 淳・長谷川福次・布施光敏・三上徹也・水沢教子・利渉幾多郎・渡辺裕之・伊井出建設
6. 発掘調査参加者 (敬称略)
小口英一郎・高野勝規・中島 透・中古尚秀・三木陽平・三浦千鶴子
7. 整理作業参加者 (敬称略)
安藤智子・糸永紀美子・岩泉辰子・小口英一郎・佐々木認・篠田典子・中島 透・藤森絵美子・横山真

凡　　例

- ・挿図の縮尺
　　遺構 1:50
　　土器 拓本・破片図=1:3 復元図=1:4 繩文時代早期から前期前半は全て1:2
　　石器 小型剥片石器=2:3 大型石器=1:3
- ・土器の胎土に纖維を含むものは断面に黒丸を付した。
- ・土器内部のスクリーントーンは黒色処理を示す。
- ・石器実測図のスクリーントーンは磨かれている箇所を示す。
- ・遺構セクション図の標高は図中に記した。
- ・遺物写真的縮尺は挿図と同一である。
- ・遺物写真的縮尺は統一されていない。
- ・なお、本報告書に掲載出来なかったものを含め、遺物は全て北相木村考古博物館にて収蔵している。広く活用されることを望む。

目 次

例 言
凡 例
目 次

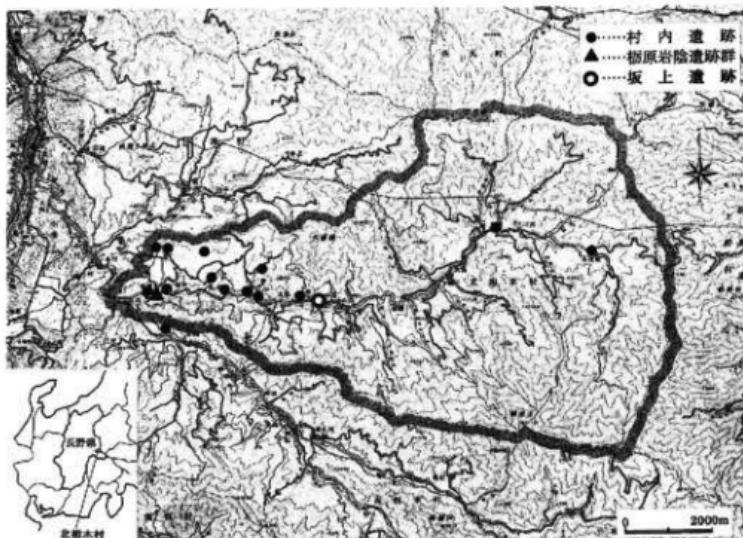
I	坂上遺跡について	1
II	調査経緯	3
III	層 序	4
IV	遺構と出土遺物	5
1.	遺 構	5
2.	包含層出土遺物	10
V	まとめ 坂上遺跡の遺産	23

遺物観察表
写真図版
報告書抄録

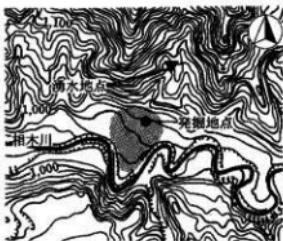
I 坂上遺跡について

北相木村は面積56.26km²で、千曲川の支流の一つである相木川のつくる谷を中心とした山村である。東側は群馬県との県境で、利根川水系との分水嶺でもある。村のはば中央を流れる相木川は、村内の最高峰標高2,112mの御座山付近を源としている。源流から中流域は、地質的には関東山地に含まれる古生代から中生代の硬いチャート層を削りながら、全体としては緩やかに流れつつも、この間に高低差約10m程の滝を形成している箇所もあり、美しく変化に富んだ景観を生んでいる。標高約900m付近からは堆積した八ヶ岳火山起源の千曲川泥流が川沿いを中心に露出しているが、蛇行する相木川の流れはこの泥流を穿ち、いくつかの岩陰（ノッチ）を形成している。相木川流域のうち南相木川と合流する間にも、両岸に約160個の岩陰が確認されており、有名な棚原岩陰遺跡はこの岩陰群に属する。棚原岩陰遺跡は複数の岩陰からなり、これらの岩陰では縄文時代草創期から弥生時代、古代・中世・近世の遺物が出土しており、近隣の岩陰を含め棚原岩陰遺跡群と呼ぶことが出来る。この他にも中世の板碑が出土した岩陰（京ノ岩岩陰）も存在し、これらの岩陰は現在でも信仰の場や物置として利用され続いているなど、村の歴史を語るのに欠かせないものである。

一方で川は堆積土を削りながら流れ、幾つかの河岸段丘を造っている。この段丘は大きく8段に分けられるが、川の流れは複雑に谷を形成し、全ての面がどの場所でも確認出来るわけではない。しかしこの作用により、比較的広い平坦な地形が造られている箇所もあり、中でも現在川が大きく蛇行している山口から坂上地蔵付近では、川幅は数十メートルの断崖となるものの、その上部では複数の段丘が緩やかな傾斜



第1図 坂上遺跡位置図



第2図 坂上遺跡範囲図（1：25,000）

地を形成している。坂上遺跡はこの相木川右岸の複数の河岸段丘に広がる遺跡である(第1図)。標高は約990~1,050mで、遺跡の範囲は広く、現在の遺物散布範囲は約50,000m²に及ぶ(第2図)。

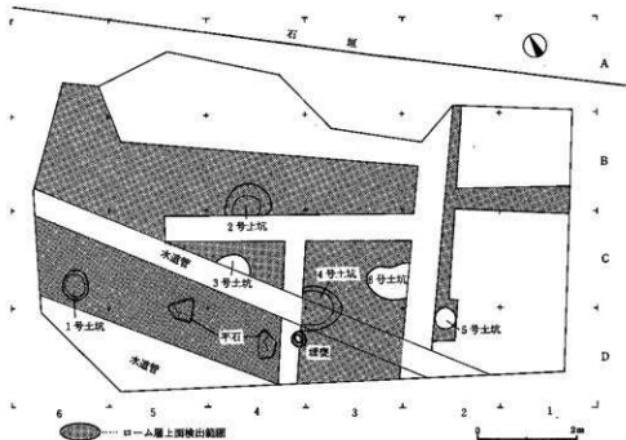
また当地は中世の山城「相木城」の網張りに含まれ、「西丸」「御門」「殿村」「馬場地」といった地名が残されている。これらを含めて考えると、遺跡の範囲はさらに東側に広がることが予想される。「相木城」は16世紀に「相木氏(阿江木氏)」が築上した山城である。「相木氏(阿江木氏)」の本拠は依田で現佐久市岩村田付近に勢力のあった大井氏の重臣とされ、文明9年(1477)には武田氏の侵入を防いだと言わっている。もっとも天文9年(1540)の武田信虎・信玄の佐久侵攻に際しては降伏しており(内通していた一派があったという)、その後武田軍に加入し活躍している。このころ南相木から移り当地に築城した城が「相木城」と言われている。武田氏滅亡の後は北条氏に付いたが、徳川方の勢力拡大に伴い相木を追われ上州に逃れた。天正10年(1582)には徳川方に属す三枝昌吉が攻め入り落城させ、以後廃城にならざるを得ない。この戦国期の風雲を体験したような山城は、現在でも石塁の一部が残されている。なお当地方は、後に江戸幕府の天領となる。

遺跡として文献に登場するのは八幡一郎の『南佐久郡の考古学的調査』であり、ここでは「坂上遺跡」「殿村遺跡」「西丸遺跡」と分けて紹介されているが、その後も含め表採品等は多く、特に绳文時代中期の遺物がこれまで度々人々の目に触れてきた。遺跡内の集落では、おそらくこの付近で出土したと思われる安山岩製の石棒がお宮とともに今も祀られている(図版1)。この石棒も元々はそのころのものであろう。

総じてこの坂上地区は、天を仰ぐ人面に例えられる御座山を望み、南向き斜面で日当たりが良く、現在も村内の住宅密集地として一集落を形成している。また背後には湧水地点があり、その流れはこの地の住み良さをさらに増しているようである。しかし人の生活に適した当地は、現在でも畑地や宅地として利用され、傾斜が急な箇所は土地を削る盛るといった行為も行われてきており、あるいは相木城築城時における改変も含め、自然地形が必ずしも残されているわけではない。さらにこれまで発掘調査は行われておらず、遺跡の内容は推測するより他は無かった。

II 調査経緯

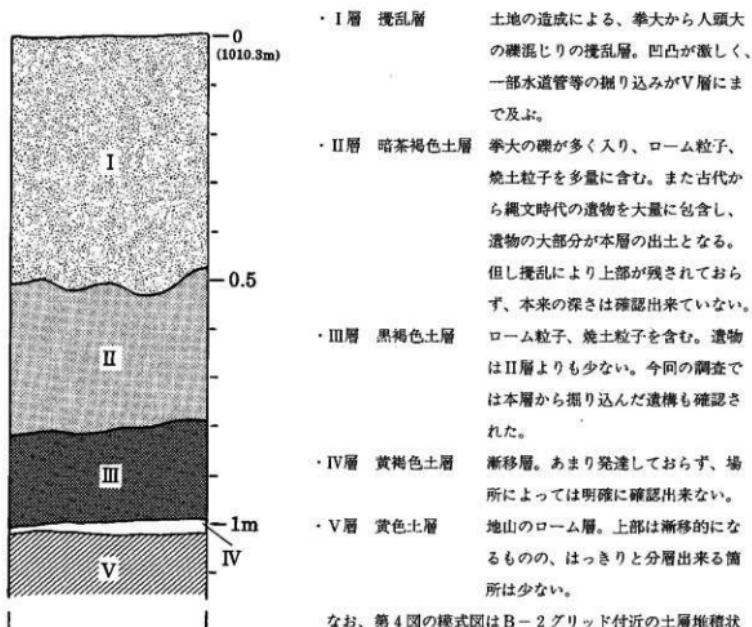
平成10年6月、村医師住宅建設が周知の坂上遺跡の範囲で行われることとなり、村当局と北相木村教育委員会で協議し、6月25、26日に5つのテストピットを設定し試掘調査を行った。その結果工事予定地では深さ20~50cmの擾乱層が存在するものの、その下部の暗茶褐色土層の中から豊富な遺物（縄文土器）の出土が確認され、さらに6月30日に南北方向に3本のトレンチを設定し重機を用いてこれを掘り下げたところ、ローム層上面で遺構と思われる箇所が確認出来た（1号土坑）。これらにより、住宅建設予定地面積約60m²の本調査を行うことを決定した。7月7日に2m四方のグリッドを設定し7月8日より本調査を開始した。すでに6月30日の試掘トレンチ掘り下げの後に、調査区全体を重機で30~50cm掘り下げてあったが、その際に縄文時代後期の埋甕が黒褐色土層中に認められたこと、またこれらの層からも大量の遺物が出土することから、これ以後はすべて手堀りで作業を行った。併せてローム層より上の面で遺構を検出すべく、調査区にベルトを残しつつ調査とした。しかし擾乱層は水道管の設置工事等により部分的にローム層に達しており、層位、遺構の確認は困難を極めた。また時間的制約から、住宅基礎の下面30cm以下のレベルで現地表面からの深度をほぼ一定にするのみで、必ずしも調査区全体をローム層上面まで掘り下げることが出来なかった。さらに確認出来た遺構についても、一部を除いて埋め戻し保存というかたちをとった。7月14日には現地での作業を終えた。



第3図 調査区平面図 (1:100)

III 層序

今回の調査区付近は本来南に傾斜していた地形と思われるが、明治5年には背後に役場が建設され、その駐車場としても利用されており、背後に1~1.5mの石垣が存在する。あるいは既にそれ以前の畠としての利用時期に人工的に斜面を削り平らにしていたのかも知れない。ただしこれは自然の状態での段丘面を反映している可能性もあるが、周囲の状況からではその判断はつかなかった。さらに後世の擾乱が激しく、基本土層の把握は困難を伴ったが、以下のように分層した（第4図）。



第4図 基本土層図 (1:10)

IV 遺構と出土遺物

I. 遺構

1号埋甕

遺構(第5図・図版2)

セクション図にあるように、埋甕付近は後世の擾乱が激しく、また基本土層のII~III層中の遺構で、重機による掘削時にその存在に気付いたが、結果として掘り込み面を含め遺構としての完全な形は確認出来なかった。外側の土器の周りは赤褐色の焼土におおわれ、その中には土器片が含まれていた(第6図3、4)。この焼土の外側には掘り込んだ形跡は見られなかった。ほぼ原型を保っていた埋甕そのもの(第6図1、2)は激しい焼成を受けているとは思われがたく、さらにこの時期に多くみられるように石の囲いがないことなどから埋甕炉とは考えにくい。また内側の土器の内部には黒色の土がつまっていたが、やはりその様子を観察する前に掘りあげられてしまった。外側の土器(第6図1)は一部で土圧によると思われる破損個所が認められた。

遺物(第6図・図版4)

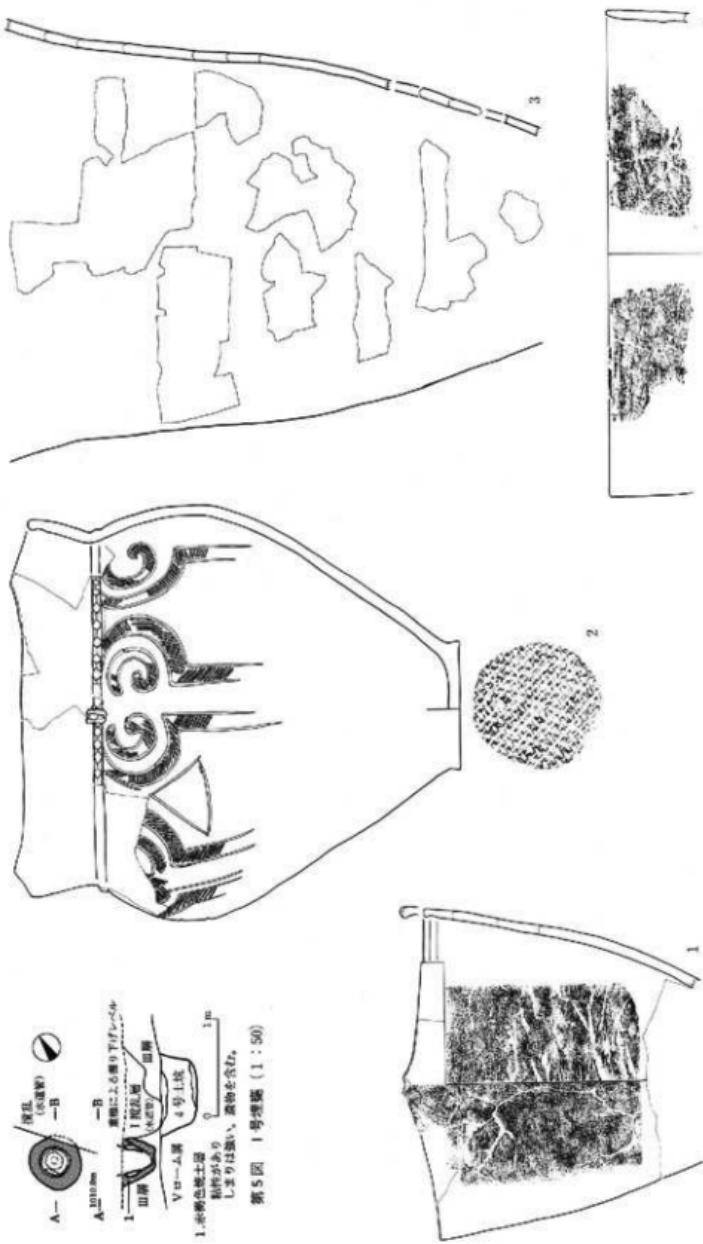
1は2の内側に設置されていた粗製土器であるが、口縁に中央を窪めた山形の突起部が一ヵ所のみある。内側に一条の浅い沈線が周回するのは外側の土器2と共に共通する。外面は継ケズリ後、上部を横ナデし、内面は横ケズリを基本に調整されている。底部付近は埋設時には既に欠損していたようである。すなわち既に壊れていたか、意図的に底部付近を破壊して埋設した状況が浮かび上がる。2は壠之内2式土器で、口縁部はわずかしか残されていなかったが、ゆるやかな波状口縁と思われる。口縁部に沈線等は存在しないが、内側に一条の沈線が周回する。脇部の沈線による渦巻き状のモチーフは2個一対となり6単位施文され、その間に同じ沈線による三角文が一ヵ所のみ見られる。底部付近では継方向の調整痕が、底部には網代痕が残されている。L Rの繩文はこの間を埋めるように施文されている。以上が確実に埋設されていた土器である。

3は焼土内から出土した後期の粗製土器であるが、かなり細かな破片になっていた。さらに胎土の状態が非常に悪く、復元作業は困難を極めたが、それでも比較的の接合がすんだ破片から径を割り出し器形を復元した。2とは異なり緩やかなキャリバー型の器形になると思われる。胴下半では外面に斜め方向、内面には横方向の調整が見られるが、内面はあばた状になっている部分が多い。また接合できなかった破片も多いが、口縁部、底部の破片は認められない。さらに残存率は高くなく、既に破損していた土器を焼土内に含めた可能性が高い。4も焼土内から出土した土器で後期粗製深鉢の口縁部破片である。胎土は1、2と比較して粗雑な印象を受けるが、表裏とも横方向の調整痕がある。復元した口径では2を内側に入れることが出来るほどの大きさになるが、3とは胎土が異なり別個体と思われ、これに統く破片資料も検出されず、既に破損していた土器であった可能性が高い。

時期

繩文時代後期壠之内2式期である。

第6図 1号埋藏遺物 (1 : 4)



1号土坑

遺構(第7図・図版2)

試掘時に調査区西南のローム層上面で検出された遺構。遺構確認面(ローム層上面)からの深さは約30cmである。皿状の形状を成す。覆土は暗褐色の土層のみで分層出来なかった。おそらく人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物(第8図・図版4)

1は中期中葉新道から藤内1式の土器であろう。口縁部の隆帯わきの押引文と、同じ工具による押引を隆帶上にも重ねることで、W字状の施文を巡らせるが、両者の施文順序は確認出来ない。把手には小さな連続爪形文、胴部には幅の広い押引文が施文されている。但し図はグリッド出土のものが接合した状態であり、混入の可能性もある。2・3は窓沢式や斜行沈線文土器(後沖式)に伴うことの多い蝶形の土器と思われる。つまみ出したかのような隆帯を持つ。4は斜行沈線文土器(後沖式)と思われる土器片で隆帯上にも沈線による加飾がある。またホルンフェルス製の小型打製石斧が一点出土している。

時期

縄文時代中期中葉前半期の遺構としておきたい。

4号土坑

遺構(第9図・図版2)

1号埋甕の北隣り、ローム層上面で検出された。セクションからは基本土層のIII層中からの掘り込みは見いだせなかった。内部は3つの層に分かれるが、レンズ上の堆積にはならず、人為的な埋め戻しが想定される。但し埋甕の調査のためベルトを残した関係上、十分な時間が確保出来ず、西側は未調査である。

遺物(第10図・図版4)

遺物の出土は少なく、繊維を含んだ土器片が2点出土したのみであった。1の外面は、凹凸がありはっきりしないが条痕あるいは縄文とも思われる痕跡がある。内面には条痕がみられ、縄文早期後半から前期前半の土器片と思われる。2は前期前半の土器片で大量の繊維を含んでいる。L Rの縄文を経方向に転がしている。

時期

出土した土器には時間幅が考えられるが、縄文時代早期後半から前期前半に造られた遺構と思われる。

2号土坑

遺構(第11図・図版3)

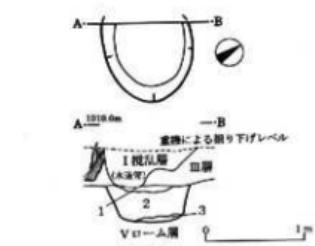
2号土坑はローム層上面でプランが確認されたが、調査時に土層確認のため残していたベルト断面にはそれより上部の掘り込みが観察された。遺構上部は擾乱により破壊されているが、III層中に壁が確認出来る。土層は一層のみで、ローム粒子を多く含む黒褐色土層であった。この遺構ではセクション上でIII層中の壁が確認出来たが、今後の調査ではローム層に及ぶ前に遺構を確認する方法の摸索も課題と言える。なお、ベルト部は調査が及ばず、南側は未調査である。遺物は確認出来ていない。時期も不明と言わざるを得ない。



第7図 1号土坑 (1:50)

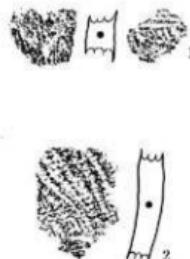


第8図 1号土坑遺物 (1=1:4, 2~5=1:3)

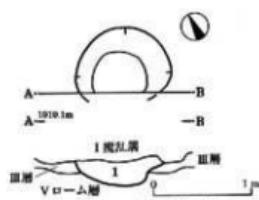


1. 塗褐色土層 ローム粒子はやや少ない。
2. 塗黄褐色土層 黄色粒子を若干とローム粒子を多量に含む。
3. 塗褐色土層 粘性、しまりとも弱い。

第9図 4号土坑 (1:50)

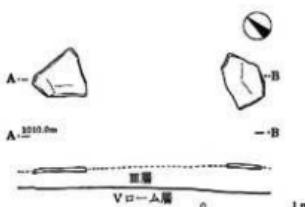


第10図 4号土坑遺物 (1:2)



1. 塗褐色土層 ローム粒子を多く含む。

第11図 2号土坑 (1:50)



第12図 磚石遺構 (1:50)

3・5・6号土坑

遺構(第3図・図版2~3)

3・5・6号土坑は、ローム層上面で確認出来たものであるが、完掘を行わなかった遺構である。それぞれ若干の所見を紹介するに留めたい。

3号土坑はローム層上面で検出されたが、水道管設置による破壊が激しかった。掘り下げず埋蔵保存とした。5号土坑は土坑としたが形状は柱穴に近い。時間の関係から途中までの調査であり、深さは明らかではないが、約10cm掘り下げる時点では地山には達しなかった。6号土坑はプラン東側は未確認であるが不正形であると予想される。ほとんど掘り下げずに埋蔵保存とした。

敷石遺構

遺構(第12図・図版3)

III層黒褐色土層中に鉄平石が2つ、約150cm離れて検出された。レベルもほぼ同じであり、付近からは縄文時代後期の土器が多く出土している。このようなことからあるいは縄文時代後期の敷石住居とも思われたが、これに続く平石は確認出来ず、また周囲にも床面と考えられるような硬化面や関連する焼土、柱穴も見られないことなどから、今回は住居址とは認定しなかった。しかし遺物の集中度合いなどを考慮すると何らかの遺構とも考えられ、ここでは敷石遺構とだけ表記しておくこととする。また1号埋甕との関係であるが、近接しているにも関わらず、平石のレベルが埋甕口縁より約35cm低いことから、単一の遺構とは認め難く、別の遺構とした。しかしこのような事例が多く見つけられれば、あるいは敷石住居址とその内部施設としての埋甕となる可能性はあるかも知れない。

時期

付近の遺物の状況から、縄文時代後期としておきたい。

2. 包含層出土遺物

縄文時代早期（第13図・図版5）

今回の発掘調査で確認された最古の遺物は縄文時代早期後半の貝殻条痕文系の土器で、全て胎土に纖維を含む。1は焼成が良く纖維は少な目で、幅の広い条痕が表裏に施されている。2は外面に条痕文が施され、内面は調整時の指頭によると思われる凹凸が見られる。3は比較的間隔の狭い条痕が表裏に施されている。4は平底で内面にも斜め方向の条痕文が見られる。外面下部では縱方向に、これに統くように底部にも条痕が見える。

5～9は多量の纖維と鉱物を含み、縄文地文の上に沈線を施文する土器である。5は口唇に刻みを施し、おそらくL Rの縄文施文の後、幅3mmほどの櫛歯状の工具を用い沈線による幾何学的文様を描いている。

さらに口唇下に2本の沈線を横位に配しているが、2本の間隔や口唇部からの距離は一定していない。口縁はやや波状となるが意図的なものとは捉えがたい。6は縄文の施文や沈線による文様、口唇部の刻み、さらに胎土、色調、口径など極めて5に近く、これと同一個体と思われるが、口唇下の周回する沈線が1本のみであり、さらに縦横の施文順序も5とは逆になることから、ここでは別の図で示した。7、8はL Rの縄文地文で胎土等も5・6に良く似る。9もやはり纖維を含み、縄文施文の上に沈線を施しているが、内面には調整の痕跡が見える。色調もやや暗い。これらは早期後半、あるいは早期末の土器と位置付けておきたい。

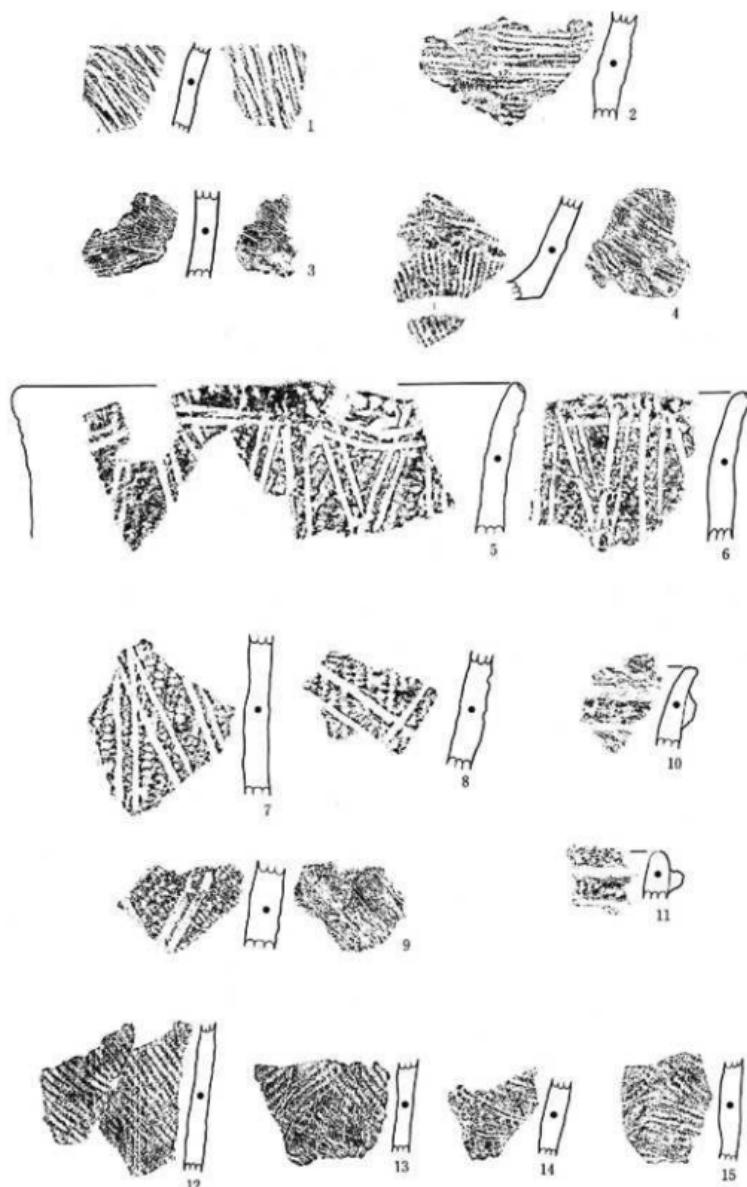
10と11は纖維を大量に含み、口唇部、隆帶上にも施文を施した土器である。10はやや外反し波状口縁とも思われる。L Rの縄文が口唇にみられる。隆帶上にも施文があるが縄文原体によるものかも知れない。11もL Rの縄文が口唇に見られる。これらも早期後半から早期末の土器であろう。

12～15は同一個体と思われ、纖維と鉱物を多く含み硬く焼かれているが、薄手で内面の調整があらく凹凸が顯著である。外面にはR Lの縄文や同じ原体の向きを変えた羽状縄文（13）、さらに条痕が確認出来る。纖維を含みつつ縄文と条痕が見られることなどから、早期末から前期初頭の土器と思われる。

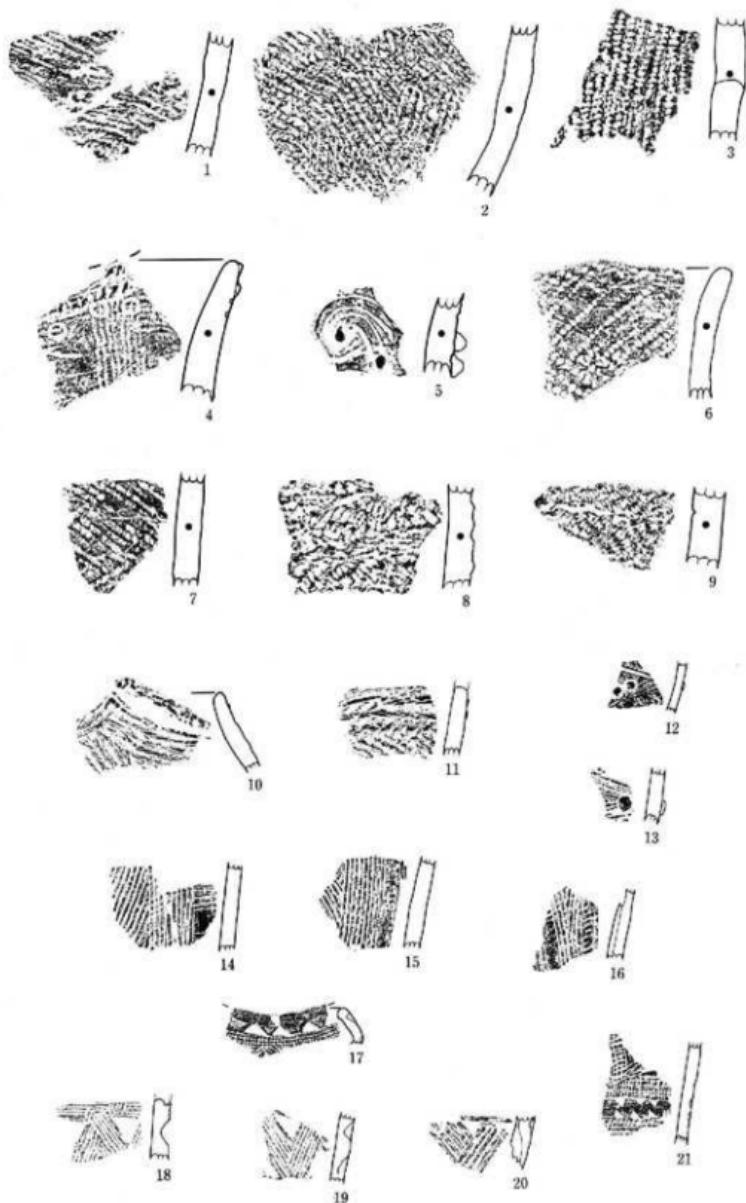
縄文時代前期（第14図・図版5～6）

1～9は前期前半の纖維縄文土器群であるが、図示しなかったものを含め明確な時期区分が難しい破片資料が多く、1や2のように早期に遡る可能性のあるものも含めた。1は撚糸で施文されており、纖維・鉱物の混入具合や色調あるいは内面の状態など早期後半に位置づけた第13図5～8によく似る。2は底部付近の破片で、多方向の撚糸文が見える。丸底あるいは尖底になるとと思われ、1同様やや古いものの可能性もある。3は縄文R Lが斜め方向に密に転がっている。4は撚糸面と直痕文土器である。波状口縁を成し、纖維の混入は比較的小ない。内面は丹念に調整されている。花積下層式の時期と言える。5は渦巻状の沈線文と瘤状の貼付文が付されている。纖維の混入は比較的小なく、表裏とも横方向の成形痕が残されている。関山式の最古段階に位置づけられよう。6は比較的纖維の混入が少ないが、鉱物が多く含まれる。結節の羽状縄文を施している。施文は口唇部にまで及ぶ。7は明るい色調で羽状縄文であるが結節はみられず、撚りの異なる原体でその効果をもたらしている。8は蕨状縄文が見られ、関山式と言えよう。9はL RとR Lの縄文を組み合わせた結節の羽状縄文が施される。

10～16は前期後半の土器である。10は諸磯b式の口縁部で大きく内側に傾く。浮線文の上に刻みを付け、口唇部にも細い浮線文が見られる。11も諸磯b式で、結節羽状縄文を地文にもつと思われ、刻みを入れた浮線文を張り付けている。12～13は諸磯c式である。12は浅く細い沈線文の上にボタン状貼付文がある。



第13図 包含層出土純文時代早期土器 (1 : 2)



第14図 包含層出土縄文前期土器 (1~9 = 1 : 2, 10~21 = 1 : 3)

13も同様であるが沈線はやや太い。14～16は同一個体で焼きは極めて良く、内面もよく調整されている。縦方向のみではなく横方向にも集合沈線がめぐる。破片資料のため確定ではないが、諸磯式の特徴であるボタン状貼付文が見られず、時期的には前期末から中期初頭に含まれる可能性もある。

17～21は前期末～中期初頭に位置付けられる。17は大きく内曲しあわせ状になる口縁部破片で、三角形印刻文及び集合沈線と同じような構成の連続した押引文で装飾される。18～20は集合沈線文と三角形印刻文が見られる土器である。18と19は同一個体で胎土には黒雲母を含む。20は18・19よりも細く鋭い沈線で装飾され、三角印刻文も小さく浅い。21は沈線による格子目文と小型の三角形印刻文が見られ、鉢を多く含む。

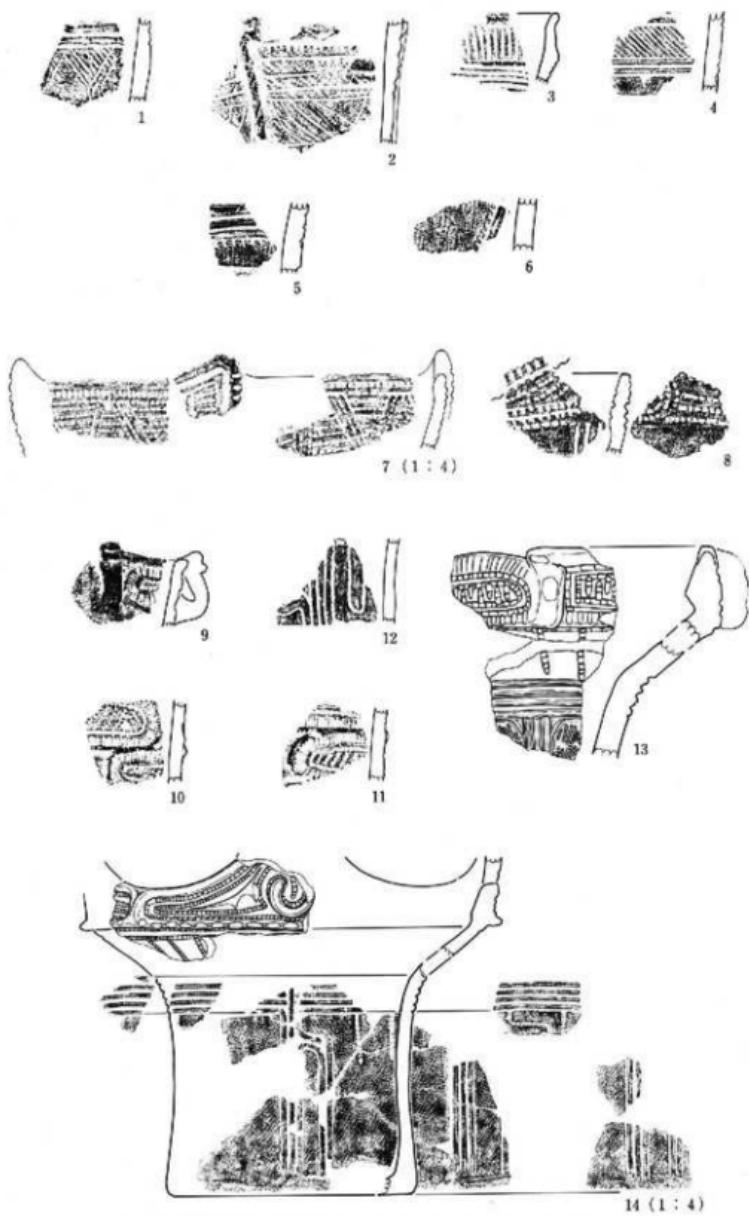
縄文時代中期（第15～17図・図版6～8）

第15図1～6は中期初頭の土器である。1は沈線によりY字状のモチーフが描かれている。2は縦方向の隆帯の上にも地文と同じLRの縄文が施されている。また沈線と棒状工具による刺突も見られる。3は口唇部にLRの縄文が見られ、沈線による縦及び横方向の施文がなされる。4は沈線主体の施文が成される土器で地文は認められない。小形化した三角形印刻文が残る。5・6は東北信地方に多い深沢タイプの破片資料である。どちらもRLの縄文と半隆帯の施文がなされている。

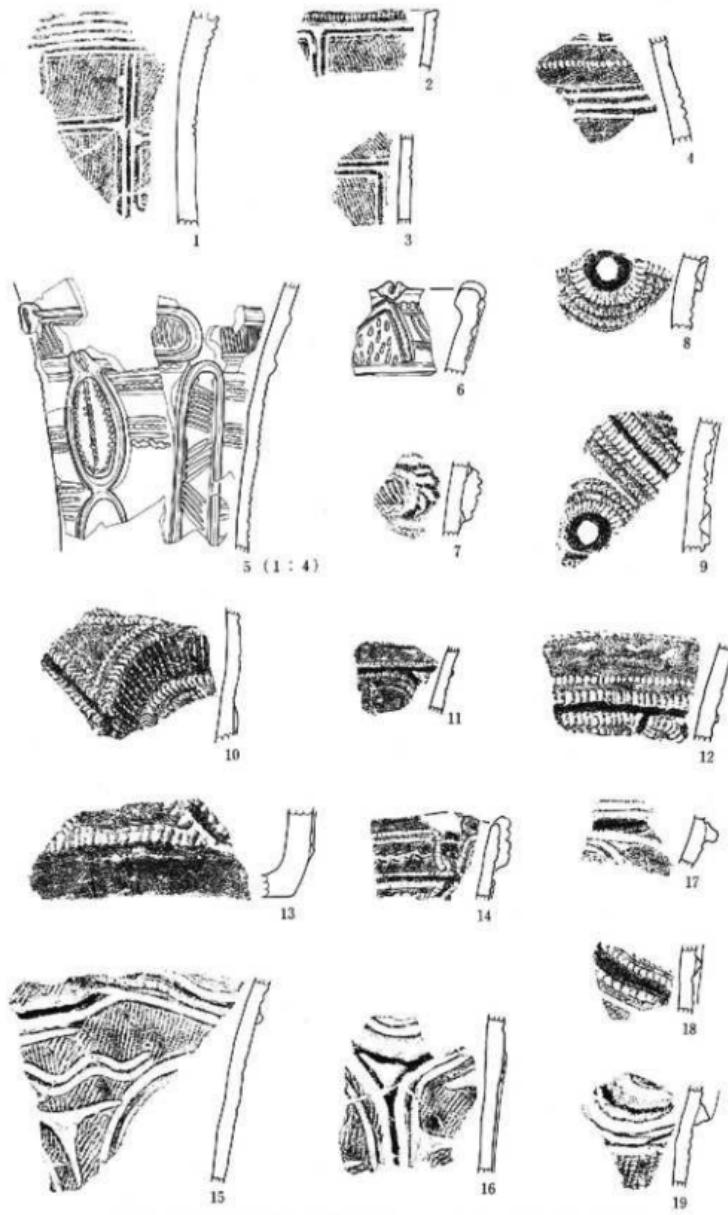
第15図7～12は猪沢式の土器である。7は口縁部文様帯のみの残された土器で焼きは良く、幅の違う二種類の角押文が施されている。8は表裏に角押文が施され、外面には筒状の工具での刺突も見える。9～11は同一個体で、椭円区画を取り巻く幅広の角押文、その内部の幅の狭い角押文が見て取れる。口縁には把手が付き、胎土に黒雲母を多く含んでいる。12は約2mmという細い角押文で文様を描いている。比較的薄手で小型の土器である。

第15図13～第16図4は縄文の地文と半截竹管による半隆帯が特徴的に見られる土器である。第15図14は、隆帯（やや横長の圧痕の入った点は特徴的である）で区画されその内部に角押文が施された口縁部文様帯を持ち、底部の張り出しやす胴である点など一見猪沢式と呼べるような土器である。口縁部文様帯直下の、周回する角押文と下方向にのびる角押文からなる文様帯も同型式の一部には存在する。しかし胴部文様帯上部で5本の半隆帯が周回し、底部近くまで半隆帯の垂下文がクランク状に延びるなど千曲川水系の土器に多い文様構成をとる。胴部のモチーフは4単位と考えられ、間には口縁部と同じ工具による角押文がやはり一部クランク状になりながら下方向に伸びる。さらに胴部にはRLの縄文が施文されている。13もこれに似た構成の土器と思われ、棒状の工具と幅広の浅い押引で加飾された隆帯とその内部の角押文の施文による口縁部文様帯、その下の角押文にて構成される文様帯、さらに胴部文様帯上部で横位の平行半隆帯が走り、その下には地文の縄文(RL)と垂下する半隆帯が確認できる。色調や胎土は異なるが、この2つの土器の構成は共通しており、猪沢式の特徴と、縄文地文及び半截竹管による半隆帯という千曲川水系あるいは北陸地方の土器の要素を含んだ土器と言える。今後類例の増加が待たれる。第16図1も横方向の平行半隆帯の下に縄文帯がある土器で、やはり半隆帯が縱位に走るが、さらに横方向にも延び区画も成されているようである。2はRLの縄文(1段多条)地文で口部に連続の爪形文が配されている。3もこれと同一個体の胴部破片であるが、縄文施文後に半截竹管による半隆帯及び沈線で縄文帯が区画されているのが分かる。4はRLの縄文の地文にやはり半截竹管による横位の半隆帯が施され、その間に区画された空間は縄文が擦り消され、押引の加飾がある。ほぼ猪沢式に並行する土器と考えておきたい。

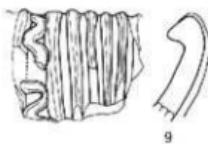
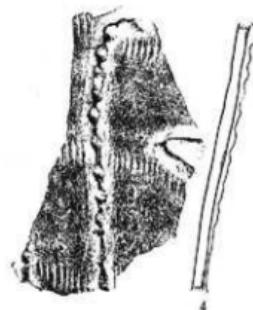
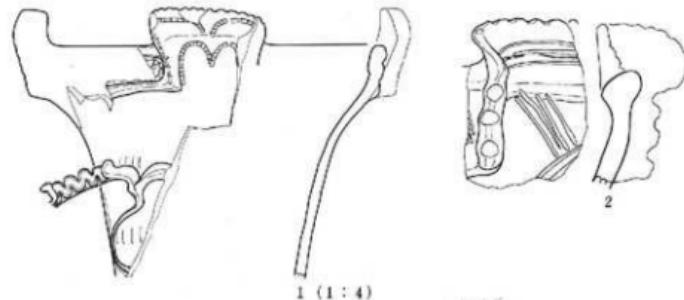
第16図5～7は猪沢～新道と並行する斜行沈線文土器（後沖式）である。5は比較的残りの良かった個体で、隆帯による区画と区画内の沈線、さらには胴部の横向きや波状の沈線など、この種の土器の典型で



第15図 包含層出土縄文中期土器 I (1~6・8~13=1:3, 7・14=1:4)



第16圖 包含層出土遺物釋文中期土器 2 (1~4 + 6~19=1:3, 5=1:4)



第17图 包含层出土纯文中期土器 1 (1:4, 2~14=1:3)

ある。6は細い沈線と刺突がみられ、色調・胎土は他の個体と大きく異なる。7は胎土が5に似るが、横円区画内の沈線は細い。

第16図8～14は新道から藤内1式の土器である。8・9は同一個体でペン先状の工具による三角形の押引文などから新道式と思われるが、文様構成は予測が難しい。黒雲母を多量に含んでいる。10は新道期の抽象文の一部と思われる。隆帶脇は2種類のペン先状工具による施文がなされ、さらに抽象文上にはより細い工具による施文がある。内面はナデの痕跡が顕著である。11は明るい色調で焼きは良い。小型の深鉢でやはり隆帶脇の三角形の押引の装飾から新道期の土器と思われる。12は表裏ともよく調整され完成も良い土器で、幅広の角押文で施文される。藤内1期の土器であろう。13はやや大型の底部破片で三角の区画が伺える。14はやや小型の土器の口縁部で区画内の波状の沈線など藤内1式の特徴を示すがやや古い印象も残る。

第16図15～19は焼町土器古段階（新巻類型）の土器である。15はやや大型の胴部破片で、表面は赤褐色と黒褐色のまだら状になり、内面には横方向の調整痕が顕著である。沈線は広く浅い。16はこれと同一個体である。17、19はしっかりと隆帯を持つ。18は隆帯の両脇を押し引きで加飾している。統じて文様構成は複雑で、どれも黒雲母を含み色調などもよく似るが、繩文原体の違いなどから15と16以外は別個体であろう。

第17図1～4は阿玉台式の系統で、1は阿玉台1b式であろう。角押文で施文され扇状の口縁を持つ。2は阿玉台1b式のシルエットを持つものの、胎土には黒雲母がほとんど含まれず、施文も沈線文を用いるなど異質な面が多い。またその沈線も複数列をなす点は同2式に近い。3は細い棒状の工具で2列の有節沈線文を施した阿玉台2式土器と思われる。4は器面に輪積み底が残される。連続の爪形文などからやはり阿玉台1b～2式と思われるが隆帯上の圧痕は特徴的である。

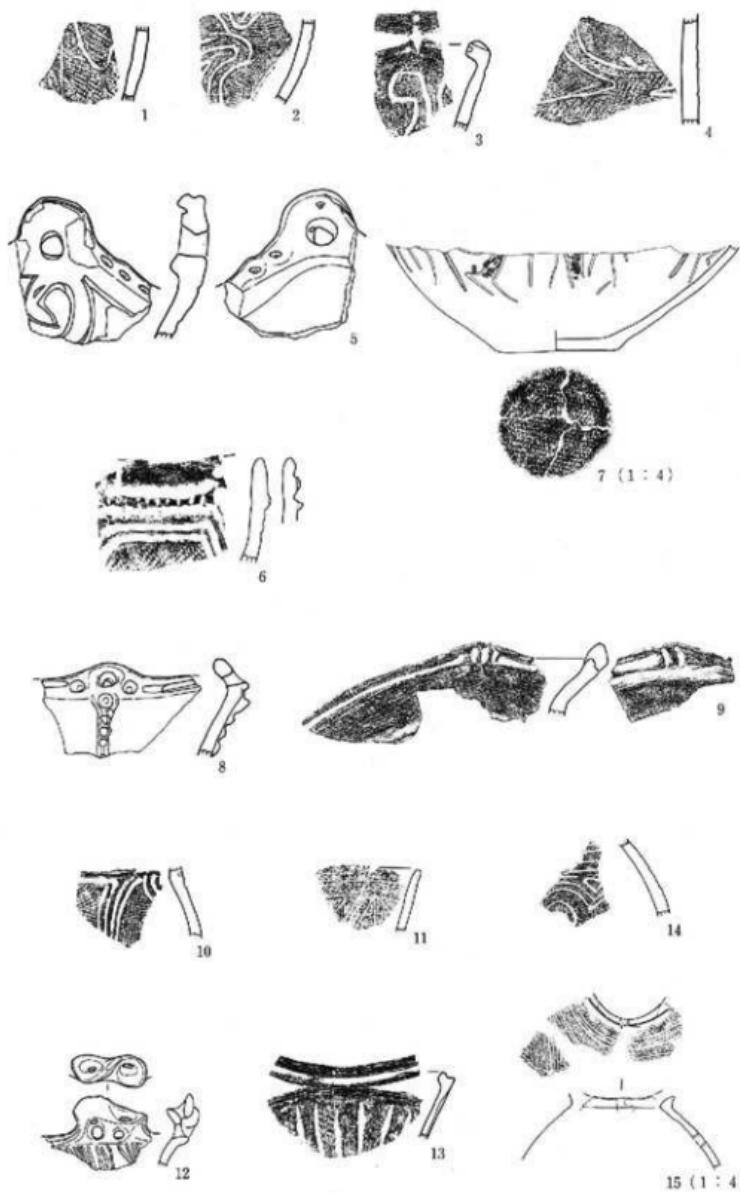
このように、本遺跡では中期中葉前半、中部高地の編年でいう猪沢・新道・藤内1式段階において特に多くの地域の土器や、地域間の差を内包した土器が検出されており興味深い。

一方で中期中葉後半の土器は多くない。第17図5～8がこれにあたるが、5は隆帯に爪型文を施し、下部では沈線による区画の一部が残る。藤内2式と思われる。6は井戸尻1式、7は井戸尻3式の深鉢である。また浅間山山麓でもまとまった出土を見る焼町類型の土器は8の僅か一点のみであった。

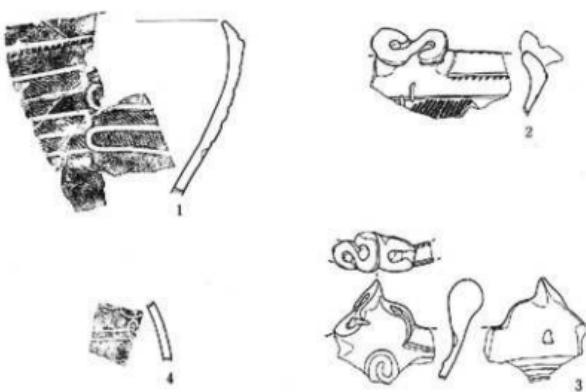
9～14は中期後葉の土器であるが、やはり数は多くはない。9は中期後葉初めの梨久保B式（唐草文系土器）の口縁部で、胎土に黒雲母や白色粒子を多く含む。10は半隆帯の上に波状の隆帯を張り付けた曾利2式の頭部である。11はあまり類例を見ないが、LRの繩文地文で隆帯による区画と、波状に張り付けた隆帯が見える。12・13は中期後葉後半の曾利3～4式である。14は関東地方に多い連弧文系の土器の口縁部と思われる。

繩文時代後期（第18～19図・図版8）

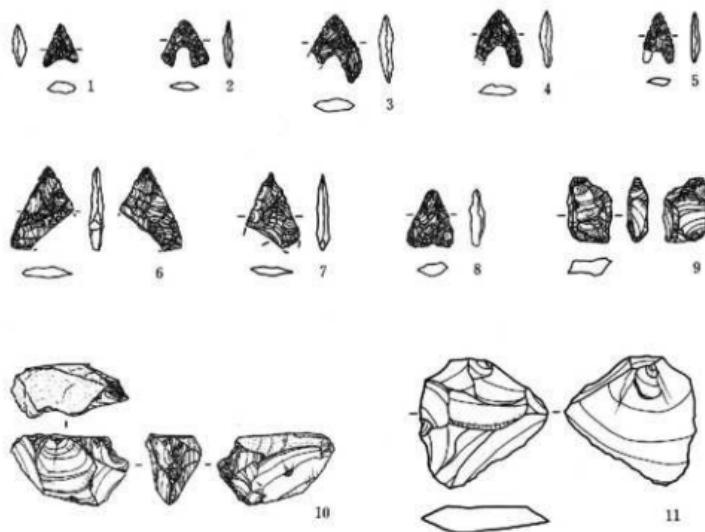
第18図1～2は中期末から後期初頭の胴下半の破片資料と思われる。2は特に複雑な文様となり後期初頭としてよいであろうか。3～5は後期初頭称名寺式並行の土器である。3は沈線で区画された内側に細かな繩文を施し口縁は内側に屈曲する。4は称名寺式に見られるJ字文が描かれている。5は地文が見られないが、沈線により文様を描き、貫通した穴のある突起を有す口縁である。6～7は後期初頭から前葉の土器と思われる。6はあまり類を見ないが、刺みのある隆帯や太く浅い沈線による区画を持つ。7は大型深鉢の底部付近の破片で、D～4グリッドで底を上に向かう漬れたような状態で出土した（図版3）。沈線は浅くLRの繩文はこの間に充填されるが不規則で、表面のミガキによってつぶされ、僅かな痕跡のみ



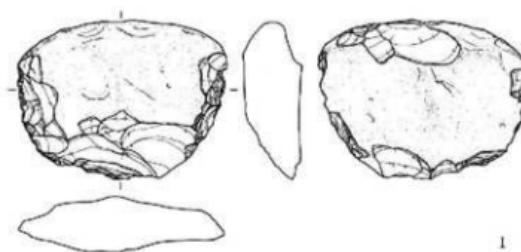
第18図 包含層出土縄文後期土器 (1~6・8~14=1:3, 7・15=1:4)



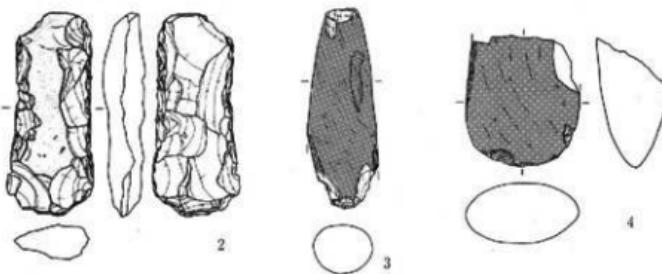
第19圖 包含層出土繩文後期土器 2 (1 : 3)



第20圖 包含層出土小型石器 (2 : 3)



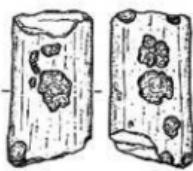
1



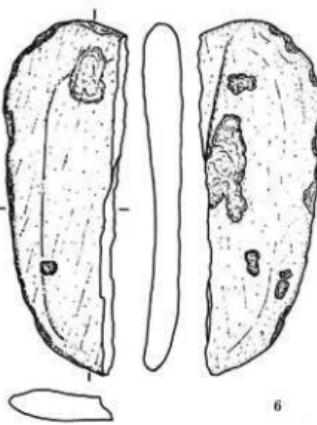
2

3

4



5



6

第21図 包含層出土縄文時代大型石器 (1 : 3)

を残す箇所もある。また刻みのある細い隆帯が付く。底部には網代痕が見える。

8～15が後期前葉、壠之内式並行期の土器である。8、9は口縁部のみであるが太い沈線が周回することなどから壠之内1式もしくは同2式の古い段階としておきたい。8は貫通した穴のある突起部を持ち、そこから圧痕のある隆帯が垂下する。焼きは良い。9は表裏面とも丹念な調整がなされ、硬質に焼かれている。10は深鉢の底部で焼きは良い。11は壠之内2式に多い朝顔形深鉢の口縁と思われるが、LRの繩文の上に描いた幾何学的な文様は、モチーフこそこの種の土器に似るもの、かなり先のとがった細い工具を用いており、比較的薄手で胎土も鉱物が多く含むなどの特徴がある。12は黄白灰色で、把手部には4つの貫通した穴があり、上面から見ると8の字状をなしている。口縁部以下は沈線で施文。南三十稻場式の影響が感じられる。13は焼成が良く、口縁から内面にかけて丹念に磨かれている。垂下する沈線及び口縁を回る沈線は共に浅い。擦り消し繩文が施されている。千曲川水域で壠之内2式に伴う土器といえよう。14は深鉢あるいは注口土器と思われるが、胎土に砂を多く含み、色調も表面が赤みがかり他とやや異なる。また非常に硬質に焼かれているが裏面は調整時の指頭による凹凸を残す。15も注口土器と思われ、LR同士の付加状の繩文が施文されている。焼きは極めて良い。

第19図1～4は後期中葉の加曾利B1式土器である。1は深鉢の破片で表裏面に若干あるが赤彩の痕跡が見られる。焼きは極めて良好硬質である。RLの擦り消し繩文で、表裏ともよく磨かれている。2も時期を同じくするものではやはり硬質に焼かれており文様構成等も1に似るが、口唇部には大きな突起と刻みがあり、繩文原体はLRである。3もこの時期の深鉢の口縁部である。沈線はごく浅い。4は黒褐色で丹念に調整され焼きも良い。

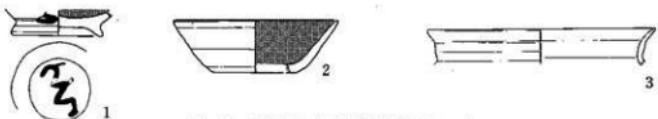
縄文時代石器（第20～21図・図版9）

剝片石器は黒曜石とチャートがほとんどであった。第20図1～8が石鏃で、このうち1～6は黒曜石製である。中でも脚のあるものが目立った（2～5）。6はやや大型で主要剥離面が両側打法によるものと考えられる。尚7と8がチャート製であるが、このほか示していない剝片なども含め、使われたチャートのほとんどが青色系のもので極めて良好似た石質であった。9は黒曜石製の所謂楔形石器であるが、用途の断定は難しい。ここでもそれについての言及はしないでおく。10は黒曜石の残核である。礫面を残しており、想定される原石の状態も大型とは考えにくい。一部刃部として使用された可能性がある。11は連続的に剥がされたと思われる剝片で、群馬県地方の石材、黄玉石が使われている。

大形石器は比較的の出土が少なかった。第21図1は緻密な安山岩の礫素材の石器で、三方向を刃部として使用した可能性がある。2は打製石斧である。ホルンフェルス製で、礫面を残す。3は乳棒状磨製石斧と思われるが、使用のためか刃部は破損している。全体が磨いてあり、側面は一部敲打痕が残る。4はやや大型の磨製石斧で、刃部は厚い。やはり側面は敲打で整えた後磨いたようである。5は緑泥片岩製の棒状の石器で、対になる面に敲打による凹みを有する。石棒の転用とも考えられる。御代田町淹沢遺跡などで同様の資料が紹介されている。6はやはり緑泥片岩で作られた石皿で側面の形状出しに敲打も用いたようである。裏面にも敲打によるごく浅い凹みがある。皿状の中央の凹みは浅く、形状からは縄文時代後期のものと思われるが、石材の性質上ものを磨り潰すという行為には向かないとも思われる。

古代土器（第22図・図版9）

平安時代の土器類が出土している。1は高台坏で墨書きが見えるが、書かれたものがどのような文字であるかは読みとれない。底部糸切り後高台を付け、内面が黒色処理されており9世紀末から10世紀初めの土



第22図 包含層出土平安時代遺物（1：4）

器と思われる。2も壊で底部は残されていなかったがやはり内面が黒色処理され、丁寧に磨かれている。3は甕の口縁部破片で、傾きなどから1とはほぼ同時期と思われる。この時期の資料は村内では発見が少なく、今後詳しい調査が必要とされる。

V まとめ ～坂上遺跡の遺産～

長野県南佐久郡北相木村は、関東山地の西縁に位置し、千曲川の支流相木川が緩やかに流れる山里である。東端は群馬県上野村と接しており、信州とはいっても古くから関東地方とのつながりも強かったようだ。考古学的には柄原岩陰遺跡が著名であるが、これを除くとこれまで発掘調査が行われていなかった経緯もあり、この関連事項を除いて、考古学的には空白地帯であるのが実情であった。しかしこのような山深い場所にも、わずかに開けた平地の縄文時代から古代の様子が少しづつではあるが明らかになってきた。

今回の発掘調査の結果から、いくつかの成果と課題をピックアップしておきたい。

縄文時代では、狭い調査区にもかかわらず早期後半から後期中頃に及ぶ遺物の出土があった。早期後半の貝殻条痕文系土器の出土で、坂上遺跡の歴史は一気に遡った。さらに早期末と思われる縄文と幾何学模様を組み合わせた土器は今後広く類例を求めて的確な位置づけを行っていく必要がある。前期についてはその前半期の織維縄文系土器群やそれに伴う然糸側面压痕文土器の出土、一方で中南信に多い中越式の出土が無いことなどから、近隣地域との比較も可能になった。ただし一部早期末から前期初頭にかけて明確な区分が出来なかった土器の位置づけは今後の課題としたい。また小海町中原遺跡でも集落が確認されている前期後半諸磯期の遺物、それに続く前期末から中期初頭にかけての土器片も確認出来た。これらもわずかな資料ながら、土器型式の分布範囲、つまりは当時の人々の生活範囲を検討するのには有効な資料であろう。そして土器型式の単位では途切れることなく中期に統く。中期中葉前半では、器形復元できる土器も多く出土し、浅間山麓から千曲川中下流域の地域色を持つ土器が多数出土した。さらにこの影響を受けながらも八ヶ岳西南麓から甲府地方の土器との共通点の多い、折衷様とも思われる土器の出土は興味深い。また一方では東関東に多いとされる阿玉台式の出土など、広範囲での交流を考える資料となる。続く中期中葉後半から後葉では出土量が激減している。これは調査以前の表採品等でも同様であり、当遺跡の特色かも知れない。ただし浅間山麓の遺跡や佐久市寄山遺跡、あるいは千曲川の源流に近い川上村大深山遺跡などではこの時期の遺構・遺物も多く、今後の検討課題としたい。後期では再び出土量が増し、中でも堀之内2式の入れ子状の埋甕がほぼ原型で出土した。さらに今後の調査如何では、この時期の敷石住居址の発見の可能性を視野に入ることが出来た。また時期は後期初頭から加曾利B1式にまで及ぶが、破片資料が多く明確な区分が出来ないものもあり、特に堀之内1式から同2式にかけては今後のさらなる検討を要す。そしてやはりこの時期にも千曲川水系での交流を想定しうる資料を得ている。石器については必ずしも時期が明らかではないが、北相木村内にはない石材である黒曜石は、おそらく八ヶ岳、和田岬近辺からもたらされたものと考えられ、これ以外にも綠泥片岩など関東地方の石材も含まれており、土器型式の地域性とともに縄文時代の地域交流を伺う資料となろう。

縄文時代以外の遺物はごく少なく、遺構も確認出来なかつたが、標高1,000mを越える当遺跡で古代の土器が出土したことも注目すべき点である。特に文字こそ確認出来ないものの、墨書き土器の出土は9世紀末から10世紀初頭の村の様子を知りうる資料となるかも知れない。

さらに相木川流域の岩陰遺跡ではこれら縄文各期の遺物、また古代の土器片なども認められており、同時期で立地の異なる遺跡間の係わりも今後の検討課題と言える。

そして今回の調査ではローム層に届く以前で完結する、あるいは掘り込みが確認出来る遺構の存在も確認された。しかし今回はその調査方法を確立するには至らなかった。また中世相木城のなわばり内にあり

ながら、この時期の遺構遺物を確認出来なかつたことは残念である。

このように概観すると、これまで柄原岩陰遺跡以外考古学的には取り上げられることの少なかつた北相木村であるが、今回の調査結果から今後の研究に貢献出来ることは多いかと思う。今回坂上遺跡での新見地をここに報告出来たことを機会とし、地域の歴史資料として活用されることを切に願うものである。また、項の関係で割愛せざるを得なかつた資料も多い。この報告書を目にした方が、これらを実見して下さり、考古学的に正当な評価や位置付けをしていただければ幸いである。

最後に付け加えておきたい。この坂上遺跡のわずかな調査期間中、見学に来られた村の方も多かった。これを受け出土遺物を北相木村考古博物館の企画展「坂上遺跡の発掘」において公開した（平成10年11月）。これは村の方々にも好評を得ることが出来、自分の住む土地の先祖が持っていた優れた技術（あるいは芸術といつてもいい）に感銘を受けている方も多くおられた。

考古資料の充実とその活用、そして地域の方に芽生えた想いこそが、残すべき坂上遺跡の遺産である。

主な参考文献

- ・八幡一郎 1928『南佐久郡の考古學的調査』
- ・菊池清人編 1977『北相木村誌』北相木村誌刊行委員会
- ・八ヶ岳墳体研究グループ 1978『ノッチの形成について—北相木村ぞいのノッチを例に—』『第四期』No.23
- ・三上徹也 1987『梨久保式土器 再考』『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- ・堤 隆 1993『川原田遺跡 平安・中世編』御代田町教育委員会
- ・下平博行 1994『J-5号住居址出土土器について』『坂上遺跡』御代田町教育委員会
- ・山口逸弘 1994『群馬・房谷戸遺跡』『季刊考古学』第48号 特集 繩文社会と土器
- ・『佐久の城』 1997 綱土出版社
- ・寺内隆夫 1997『川原田遺跡縄文時代中期中葉の土器群について』『川原田遺跡・縄文編』御代田町教育委員会
- ・緋田弘実 1997『縄文土器について』『浅沢遺跡』御代田町教育委員会
- ・山口逸弘 1997『川原田遺跡「新巻類型」と「焼町類型」』『川原田遺跡・縄文編』御代田町教育委員会
- ・児玉卓文 1998『撫糸側面压痕文土器の変遷』『さらしなの里歴史資料館紀要』第1号
- ・島田恵子 1998『縄文時代』『南佐久群誌』考古編
- ・水沢教子 1998『第五節 縄文文化の爛熟－中期』『御代田町誌 歴史編上』
- ・阿部芳郎 1999『村東山手遺跡出土の壺之内2式土器の型式学的検討』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8 村東山手遺跡』
- ・藤森英二 1999『柄原岩陰遺跡東北部天狗岩陰の調査』『佐久考古通信』No.77

付表 土質概要表

序号	地名	土壤	土壤	粘土	砂	砾	腐植	粘土性質	粘土性質	粘土性質	粘土性質	粘土性質	粘土性質
1	原住	火燒土	燒けアズリ・一輪子ナメ	火燒・ナメ・アズリ	白色粘土・少	少	灰褐色	灰褐色・赤褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色
2	原住	新林	焼文LR・新林	ナメアズリ	白色粘土・少	少	灰褐色	褐色・灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
3	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	少	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
4	原住	口林地	焼ケアズリ・ナメ	焼ケアズリ	白色粘土	少	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
5	原住	新林	新林・新林・川敷文	ナメアズリ	白色粘土	少	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
6	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	少	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
7	原住	口林地	焼ケアズリ・ナメ	焼ケアズリ	白色粘土	少	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
8	原住	新林	新林・新林文・新ナメ	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
9	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
10	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
11	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
12	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
13	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
14	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
15	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
16	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
17	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
18	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
19	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
20	原住	新林	新林	ナメアズリ	白色粘土	多	灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色

附表 土器觀察表 2

付表 土器觀察表 3

遺物番号	可視 部	形態 部	文様及び手作業	内面装飾	粘土	繊維	外毛層	内色調	出土位置	備考
12	筒状	直筒	文様なし	無	白GABY・繊維少	無	黒褐色	黒褐色	B-2	
13	筒状	直筒	文様なし	無	白GABY・繊維少	無	黒褐色	黒褐色	B-1	
17	筒状	口縁	文様なし	無	無	無	黒褐色	黒褐色	C-1	
14	筒状	口縁	文様なし	無	無	無	黒褐色	黒褐色	D-1	
1	筒状	新規部	縹文L.R.・直縫	無	無	砂	黒褐色	黒褐色	D-1	
2	筒状	新規部	縹文L.R.・直縫	無	無	砂	黒褐色	黒褐色	D-1	
4	筒状	口縁	縹文・直縫による区画	無	無	砂	黒褐色	黒褐色	D-1	
5	筒状	口縁	縹文L.R.・直縫	無	無	砂	黒褐色	黒褐色	D-1	
6	筒状	口縁	縹文L.R.・直縫・生地に引き締め	無	無	砂	黒褐色	黒褐色	D-1	
7	筒状	底部	直縫・江戸型引き締め	無	無	砂	黒褐色	黒褐色	D-1	
8	筒状	口縁	縹文L.R.・直縫	無	無	砂	黒褐色	黒褐色	C-1	
9	筒状	口縁	縹文L.R.・直縫	無	白色子(カギ)	白色子	黒褐色	黒褐色	C-1	
10	筒状	口縁	縹文L.R.・直縫	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	D-2	
11	筒状	口縁	縹文L.R.・直縫	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	C-1	
12	筒状	口縁	縹文L.R.・直縫	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	-	
13	筒状	口縁	縹文L.R.・直縫	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	C-5	
14	口縫	縫合部	縫合部	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	C-3	
15	口縫	縫合部	縫合部	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	B-3, 4	骨外に骨質の残存・黒褐色
1	筒状	口縫	縹文文式L.R.・直縫・縫合	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	C-3	
19	筒状	口縫	縹文文式L.R.・直縫・縫合	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	-	
3	筒状	口縫	縹文文式L.R.・直縫	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	B-2	
4	筒状	口縫	縹文文式L.R.・直縫	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	D-1	十脚器・底部及び外周に墨跡
1	高台	底部	縫合部	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	B-1	
22	高台	底部	縫合部	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	C-1	
3	筒	口縫	縫合部	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	C-1	
8	筒	口縫	縫合部	無	白色子	白色子	黒褐色	黒褐色	C-3	

付表 石器觀察表 3

遺物番号	種類	石 材	測定	出土位置	備考	測定	石 材	測定	出土位置	備考
9, 5	小切妻打刃	ホルンフェルス	42.6	1号土塼		9	黒雲母片岩	黒雲母片岩	1.5	C-3
1	石劍	黑曜石	(0.3)	D-4		26	16 灰灰	黒雲母片岩	9.2	C-3
2	石劍	黑曜石	0.2	C-3		11	角片	黒雲母片岩	10.5	C-3
3	石劍	黑曜石	(0.6)	C-5		1	スレッシャー	安山岩	52.2	青木村
4	石劍	黑曜石	(0.5)	C-3		2	刃打石	ホルンフェルス	18.9	D-1
20	石劍	黑曜石	(0.2)	C-3		3	刃打石	斜長石灰岩	(215.3)	付属レシ-チ
6	石劍	黑曜石	(1.1)	C-1	木材を周囲打立てて用ひ	21	4 破片	斜長石灰岩	(381.2)	B-2, 3
7	石劍	チヤード	(0.9)			5	凹凸片岩	斜長石片岩	409.3	B-1
8	石劍	チヤード	0.8	C-1		6	石皿	斜長石片岩	(623.2)	C-3



相木川対岸より
写真中央の相木川が、雲に隠れる
八ヶ岳連峰下の千曲川に向かい流れる。▼直下が調査地
点。



遺跡北側より
この南側（写真奥）が調査区。
はるかに御座山を望む。

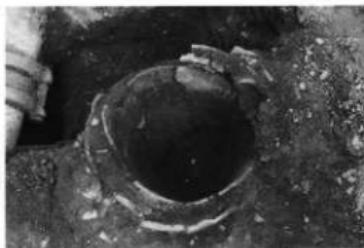


石 棒
遺跡内に立つ安山岩製の石棒。

図版 2



調査区全景
北側の石垣上より。



I号埋壺(1)
上部より。水道管がすぐ裏に走る。



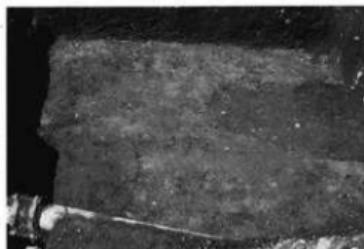
I号埋壺(2)
焼土に包まれていた。



I号埋壺(3)
内側の土器が見いだされている。



I号土坑
半分を掘り下げる状況。



4・6号土坑
ローム層上面での検出状況。



2号土坑
セクションおよび掘り下げ状況。



3号土坑
ローム層上面での検出状況。写真奥は水道管による破壊。



5号土坑
やや掘り下げたが底には到達しなかった。



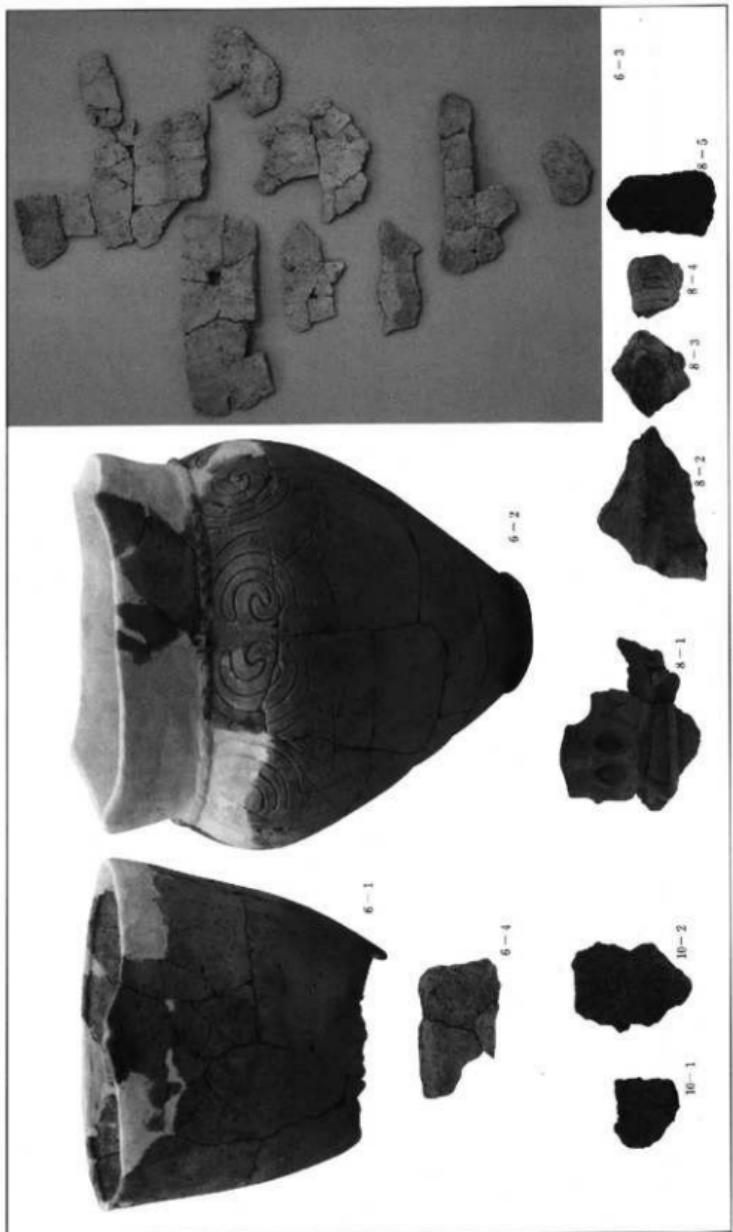
敷石遺構(1)
南側から。

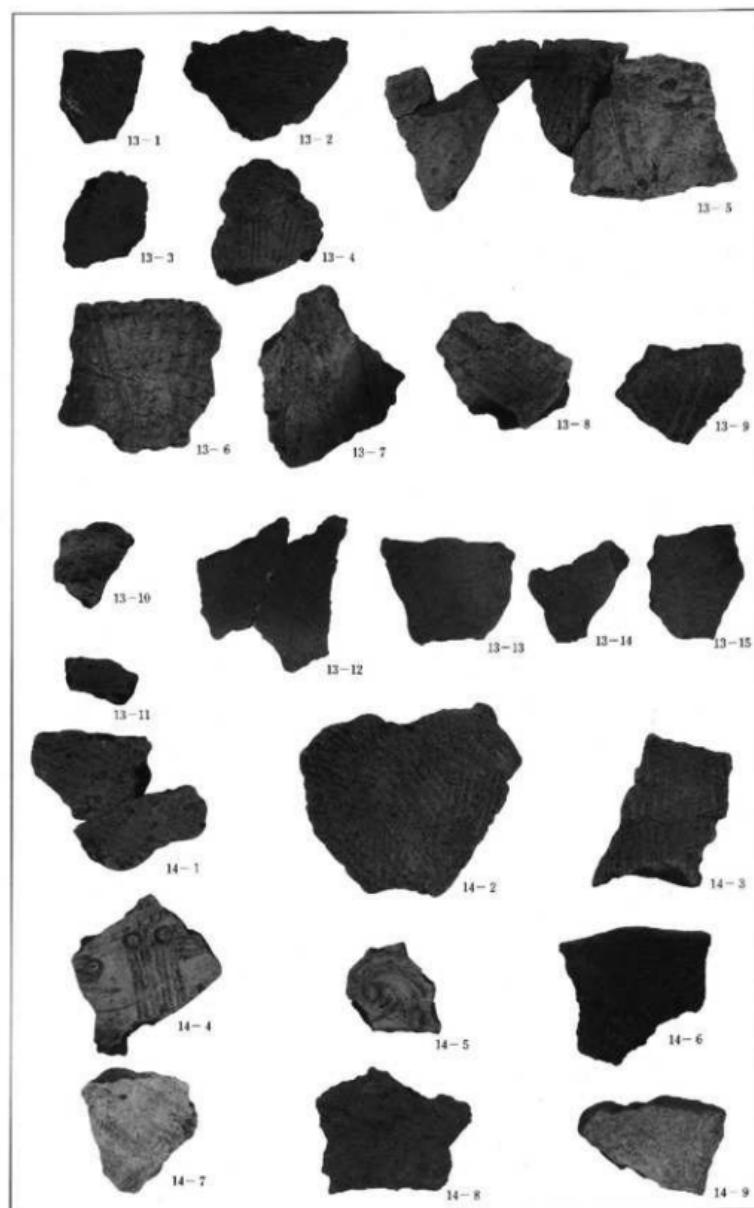


敷石遺構(2)
北側より。写真左隅が1号埋室。

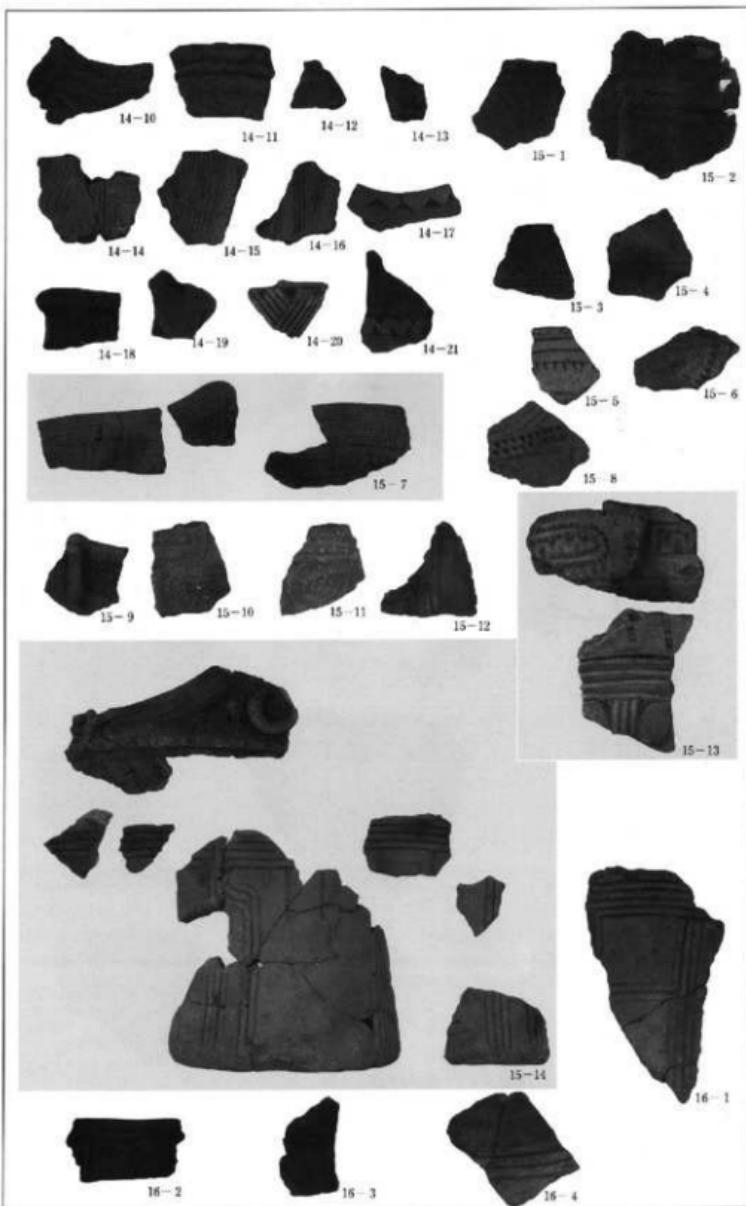


縄文後期土器
(第18図7) 出土状況。

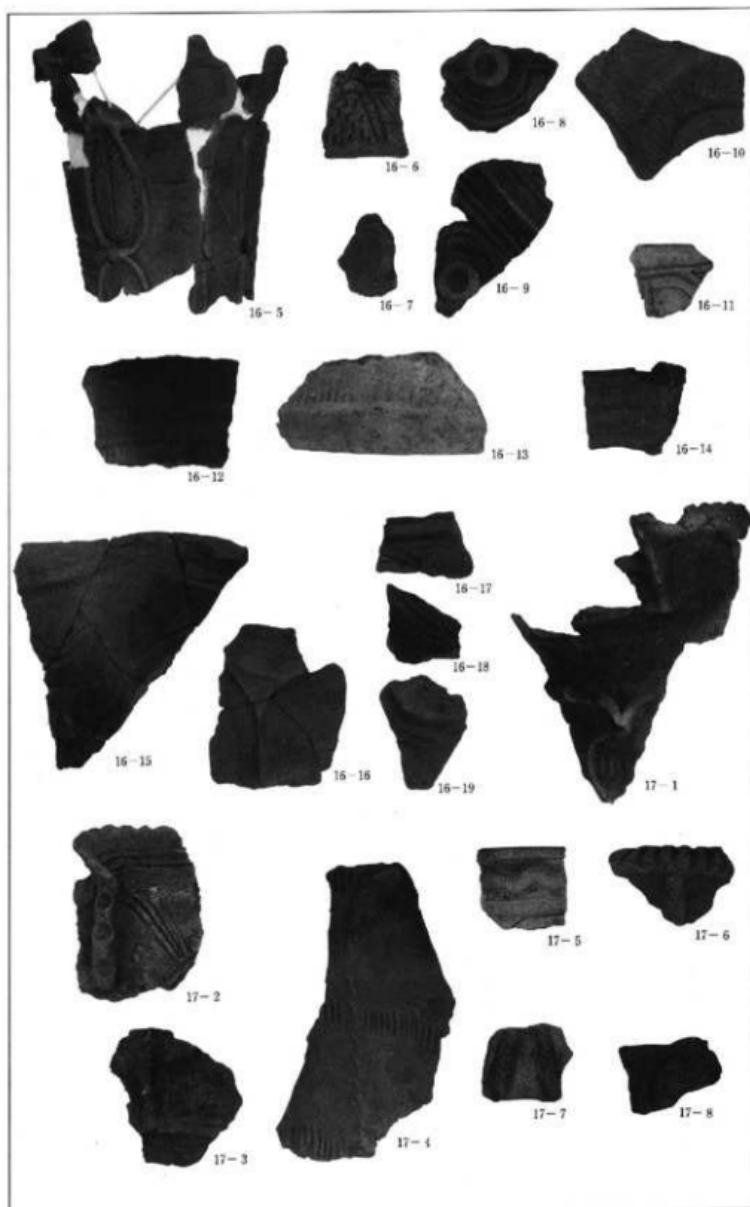




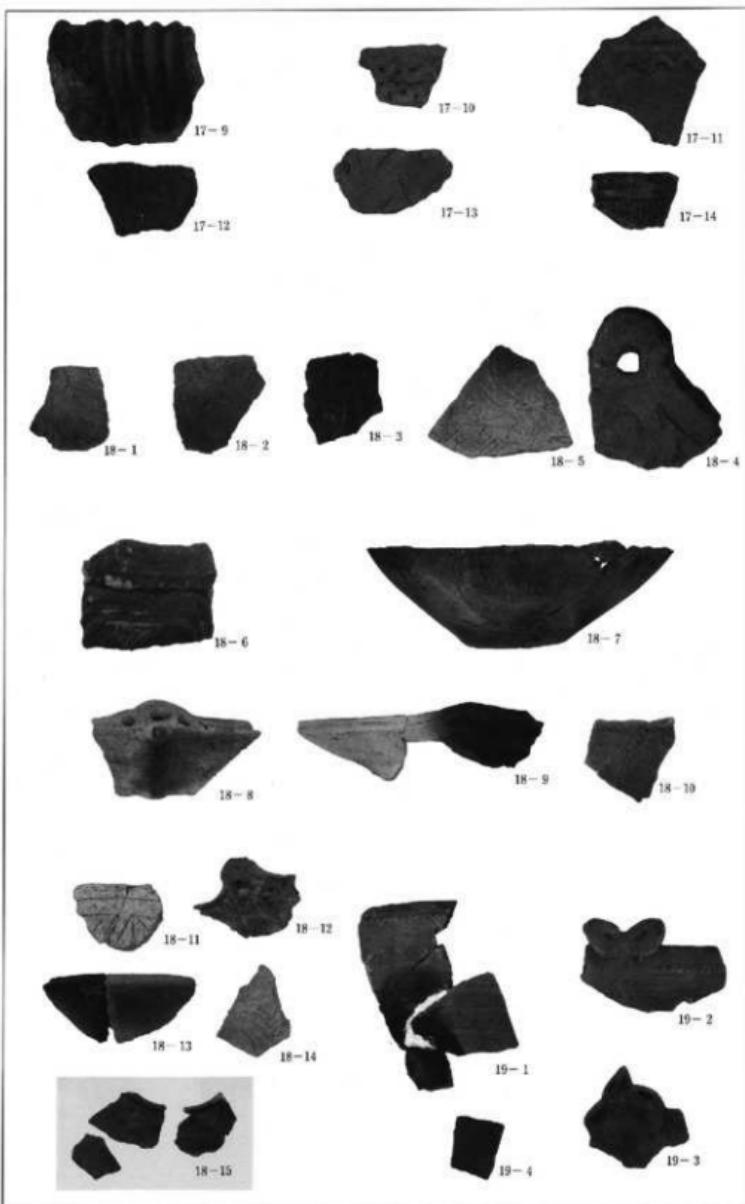
包含層出土遺物(1)



包含層出土遺物(2)



包含層出土遺物(3)



包含層出土遺物(4)



包含層出土遺物(5)



ローム層上面での遺構確認作業。



調査区北側の石垣が確認出来る。



調査区東側。ローム層上面まで調査は及ばなかった。



擾乱層、遺物包含層ともに多量の礫を含んでいた。



調査終了。後方に御座山。



心を相ませてくれた調査協力者。

報告書抄録

ふりがな 書名	さかうえいせき 坂上遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤森英二							
編集機関	北相木村教育委員会							
所在地	〒384-1201 長野県南佐久郡北相木村2744 Tel0267-77-2111							
発行年月日	2000年(平成12)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺 跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
坂上遺跡	長野県南佐久郡北相木村	20307		36度 03分 24秒	138度 33分 31秒	1998625 ↓ 1998714	60m ²	村医師住 宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
坂上遺跡	集落址	縄文時代 早期 前期 中期 後期 平安時代 9~10世紀	埋甕 土坑	1 6	縄文土器 石器 土師器	教育委員会による初めての本格的な発掘調査で、これまで知られていなかった時期の遺物が数多く出土した。		

坂上遺跡

平成12年3月31日 発行

編集 北相木村教育委員会
 発行 長野県南佐久郡北相木村2744
 ☎ (0267) 77-2111㈹

印刷 ほおづき書籍株式会社
 長野県長野市柳原2133-5
 ☎ (026) 244-0235㈹